

四方に壁 頭脳戦ラリー

2028年ロサンゼルス夏季五輪で、初採用が決まったスカッシュ。四方を壁に囲まれたコートで、交互にボールを打ち合うスピード感のある競技だ。その魅力を探った。
(豊嶋茉莉)



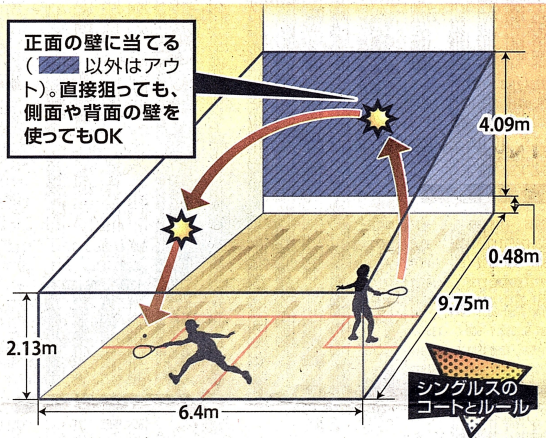
ラリーをする杉本梨沙さん(手前)と足立美由紀理事=川崎公太撮影



ワンバウンド以内に返球

対戦する選手が四方を壁で囲まれたコートに立ち、同じ壁を使って交互にボールを打って得点を競う。1ゲーム11点先取で、サブ権に関係なく、得点が入るラリーポイント形式で行われる。

正面の壁(フロントウォール)に球を当て、リターン側がワンバウンド以内に返さなければ、相手に得点が入る。ショットの際、側面や後方の壁を利用してもいいが、フロントウォールに一度も当たらなかったり、天井に当たったりした場合はアウトと判定される。



1戦体重3キロ減
京都市内のコートを訪ねると、「ズバン」と壁が壊れそうな打球音が響いていた。練習していたのは、今季の全日本選手権で準優勝した滋賀県出身の杉本梨沙さん(29)。側面や後方の壁で跳ね返らせ、前面の「フロントウォール」に当てるショットもあり、目で追うのも難しい。
パワーやスピードが重要そうに見えるが、「立体ビリヤード」とも呼ばれ、頭脳戦の要素が色濃い。いかにコート中央に陣取り、相手を走らせるか。高速ラリーの中で、どう返せば有利な展開に持ち込めるかを瞬時に判断する必要がある。
杉本さんは「こんな角度で

狙うのか、ラリーを頭の中で組み立てて相手走らせる。でも、試合中に考えていると動きが遅れてしまう」と説明。反射的に体が動くようになるまで、反復練習を重ねるそうだ。トップ選手は、1試合で体重が2、3キロ落ちることもあるという、その状況で高度な駆け引きを繰り返す。
ゴルフボール大
ラケットはテニスよりも一回り小さい。ゴム製のボールはゴルフボールほどの大きさで、温まってくると弾むようになるのが特徴。白壁なら黒ガラス張りなら白色といった具合に、色を使い分けるところもある。
記者も挑戦してみた。テニスボールほど球が跳ね返って

国内10万人 生涯スポーツ向き

2012年のロンドン五輪以降、候補に残りながらも落選が続き、五輪競技に加わるのは悲願でした。これを機に人気を高め、プレーをしたことがない方にもぜひ体験してほしいですね。



足立美由紀

10008年から全日本選手権を5連覇した日本スカッシュ協会関西支部の足立美由紀理事(63)写真真面に競技の歴史や五輪への思いを聞いた。
英国発祥の競技で、英国大使館にコートがあったことから、日本でも広まりました。現在、国内の競技人口は約10万人、コートは300面ほど。フィットネスクラブに設けられていることが多く、そこから始める方がほとんどです。
スカッシュは年齢差や男女差があまり関係なく、いかに相手を走らせるか、経験値がものを言います。私は今も大学生に勝つますよ。60、70歳代も楽しめ、生涯スポーツに向いています。

日本スカッシュ協会関西支部 足立美由紀理事



過去の記事はこちらからご覧いただけます

10月に開かれた国際オリンピック委員会(IOC)の総会で、ロス五輪の追加競技に決定。杉本さんはびくびくして信じられなかったけれど、五輪を目指してチャレンジしたい」ときっぱり。夢舞台へさらなる飛躍に期待したい。

悲願の五輪競技
こず、タイミングが取れなくて、何度か空振りした。球がどこに返ってくるかを考えるのに精いっぱいなうえ、右に左に動いていると、息が上がる。それでも、少しずつ感覚をつかみ、打ち返せるようになった。きつけれど、爽快!